

めぐり来る夏に

「一日一生涯」

大学生になった今の私は、一日一日を大切に生きているだろうか。差別を許さない生き方や、差別を乗り越えた本物の人間愛にたどりつけているだろうか。

八月が来ると、私は中学三年生の夏をふと思い出し、そんなことを考えてみる。



夏休みに入ったばかりのある日、母が田中蔚さんの「娘の遺してくれたもの」という手記を見せってくれた。そこには、日航機墜落事故で娘さんを亡くした田中さんの思い、娘さんにつながる人々の思いが綴られていたのである。

昭和六〇（一九八五）年八月十二日、群馬県御巢鷹山に東京発大阪行きの日本航空の飛行機が墜落した。死者は航空機事故最悪の五百二十名。赤ちゃんからお年寄りまで、この日偶然乗り合わせた人たちが、飛行機に未来を奪われた。

毎年この事故のニュースがテレビで流れるたびに、私は、「自分には関係がなく、遠くの話だ。」とぼんやりと画面を見つめていた。しかし、手記を読むうちに、そんな私の考えは、大きく変わっていった。

田中さんは被差別部落の出身だった。「今はもう部落差別はなくなっているのでは。」と思われがちだが、家の結びつきが強い日本では、結婚に際して、部落を理由に反対する人がまだいるらしい。

田中さんも娘の愛子さんの縁談を聞いた時、「被差別部落というところで、親戚の中には反対の人がいるかもしれない。」「娘が先々思い悩むのではないか。」と、様々な不安があったという。しかし、愛子さんは、婚約者に自分は被差別部落出身であるということを告げている。また、それを聞いた婚約者のお父さんも、二人の結婚を祝福された。被差別部落出身であるということであれこれと心配した田中さんは、自分が恥ずかしくなったそうだ。

田中さんの手記を読んで、私は、市内の中学生が集まって開かれる人権学習交流会での報告を思い出した。それは、市内の女子高生が被差別部落出身であることを理由に、交際相手の母親から交際を反対されたという話である。



その母親は彼女の身元を調べたり、「何で黙っていたのか。」と彼女を責めたりしたという。さらに悲しいことに、彼までも「なんで黙ってたんや。もう付き合えん。」と言ったそうさ。「なぜ付き合えないのか。そのことで彼女がどんな思いをしたのだろうか。」私は、いたたまれない気持ちでいっぱいになった。

差別はいけないということには誰でも知っている。しかし、実際自分の身にふりかかってくると、差別をしてしまう人がいる。この話と重ねてみると、愛子さんたちは差別を乗り越えた、本物の愛で結ばれていたことがわかる。

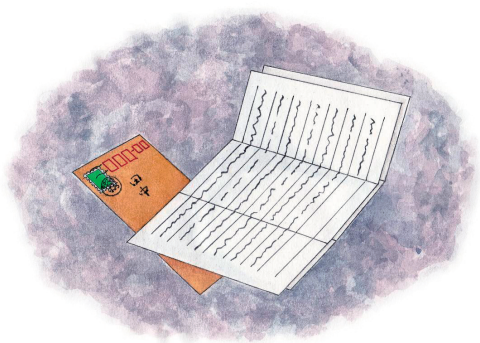
八月十二日、私は、母や弟とともに初めて御巢鷹山に登った。手記を通じて知り合った田中さんが、現地で案内をしてくださった。私は、田中さんのこと、そしてこの事故でなくなった愛子さんのことを、もっと知りたいと思った。

御巢鷹山は、かつて大きな事故があったというところを感じさせないほど緑に覆われ、川のせせらぎが響く、とても

美しい山だった。

私たちが山に登っていくうちに、所々に小さな墓標が現れはじめた。この事故で命を落とされた方たちの亡くなられた場所だ。一つの所に墜落したはずなのに、山全体に散らばる墓標は、墜落時の衝撃の強さを感じさせた。墓標に刻まれた一人一人の名前、この一つ一つに、未来につながるはずだったそれぞれの人生があったのだと思う。その中に愛子さんの名前が刻まれた墓標を見つけた。線香をお供えし手を合わせた時、はるばる訪ね、そこにたどりついた実感が足下から伝わる感じがした。同時に時の流れは、事故の惨状を覆い隠すように山を再び緑で覆ったが、ご遺族の悲しみ、心の傷はいつまでも消えることはないということを感じずにはいられなかった。

そして、ご遺族の悲しみにさらに追い打ちをかけるような手紙が田中さんに送りつけられていたということも、同時に知った。「日航機墜落事故の原因がやっとわかった。航空機事故は被差別部落の田中愛子が乗っていたため起こった。穢れをもった愛子が乗っていたからだ。」という内容の手紙だった。それを読んだ私の母は怒りで体が震えていた。平成十六（二〇〇四）年の消印。まだ新しい。もちろんこのようなことは本当に希なことだけれど



も、でもこんな人がまだにいることに、私は許せない気持ちでいっぱいになった。

しかし、そんな私たちに田中さんは、「この人自身に罪はありません。差別の歴史をきちんと教えられなかったのです。ゆがんだ偏見^{へんけん}だけを植え付けられた、いわば犠牲者^{ぎせい}なのです。」

と静かに語られた。それは、私にとって本当に思いがけない言葉だった。しかし、この言葉こそ、田中さんの深い人間愛と信念に基づいた抗議^{こうぎ}だったのだと思う。

私は、墓標に刻まれていた「一日一生涯」という言葉を見つめた。中学校で部落差別を受けた愛子さんが、己自身^{みか}を磨^{みが}こう、精一杯^{せいいつぱい}生きようと卒業アルバムに寄せ書きをされた言葉だそう。

私はアルバムに、どんな言葉を記すだろうか。今はまだぼんやりしている。でも、私も愛子さんのように、差別に負けない生き方、差別を乗り越えた本物の人間愛にたどりつけるよう、一日一日を大切に歩いていきたい、御巢鷹山の風景とともにそんな思いを心に刻んだ。



平成二十三（二〇一一）年の夏、愛子さんのことが劇になった。

「今、光っていたい娘の遺してくれたもの」という劇だ。三木市が「人権尊重のまちづくり条例十年」を迎え^{むか}て、新たな人権尊重の機運を盛り上げようと計画したものだ。

その練習風景を、弟は、田中さんと一緒^{いっしょ}に見に行くことができた。弟は、公演一週間前の熱の入った本番さながらの練習に、自然に引き込まれたという。この劇は、市民劇団として市民オーデイションを行い、一年がかりで作られたものだ。

舞台^{ぶたい}に立たれている人は、みんな生き生きと緊張感^{きんちやうかん}にあふれ、「伝えよう。」という気持ちにあふれていた。とくに、手紙が読み上げられ、田中さんが語るシーンは、弟の心に強く残ったそう。きっと、練習を積み重ねていく中で、田中さんの言葉が役者さん自身の思いとなっていたのではないだろうか。役者さんの中には、

「田中先生の名前を見て、劇に応募したんよ。『劇に出なくては。』って思ったんよ。」

と話される教え子の人たちがおられた。かつて教員をされていた田中さんは、このとき八十八歳^{やじゅうはちまい}。



市民劇団の練習風景

教え子といっても、もう年配の方ばかりだ。

三十年、四十年たっても、田中さんの名前に突^つき動かされるのは、いったい何だろう。母は、

「田中さんの、人を大切にし、差別をなくそうとする教育が、一人一人の中に生きているからこそ。」

と言った。弟は、時を越えたそのつながりに、田中さんの人としての深さを感じたと言っていた。

今、私たちの周りには、部落差別についてとりあげているテレビ番組や新聞記事は少ない。でも結婚差別やインターネット等による差別など、今も見えにくいところで差別は続いている。大切なことなのに、語られることが少ない。だからこそ、この劇が市民レベルで上演された意義は大きいと思う。このような取り組みや、差別を越えた人々とのつながりが、私たちの周りにも、また社会にも広がっていくことが大切なのだと思う。

今年もまた八月がやってきた。テレビのニュースは、慰^い霊^{れい}登山の様子とともに、今の御巢鷹山の風景を映し出している。テレビを見つめながら、私は、中学三年生のときの、あの夏の出来事とともに、田中さんのもうひとつの言葉を思い出していた。

「私は、差別のない社会を作ること^をを娘から託^{たく}されています。人を憎^{にく}む暇^{ひま}はありません。」

愛子先生へ

私は、中学三年生の時、先生に保健体育の授業を教えていただきました。そんななかで、私には忘れられない授業があります。保健の授業で、先生が言われたある言葉をノートにメモをしたことを今でも覚えています。「一日一生涯」という言葉です。いつも熱く語ってくださる先生でしたが、その日の先生のお話はいつも以上に私たちの心に響くものでした。

それからしばらくたった八月の夜、飛行機の墜落事故を伝えるテレビのニュースに、先生の名前が映し出されました。多くの友だちが電話をかけてきました。電話口の向こうで泣いている友だち。いつも明るく気さくに話しかけてくださり、大切なことを一生懸命語ってくださる愛子先生は、私たちにとって大きな存在でした。

何年かたって、私はある書店で、あの「一日一生涯」という言葉を記した本を見つけ、手に取りました。それは先生のお父さんが書かれた本でした。先生が部落差別について考えておられたこと、差別に負けずに一日一日を大切に生きていきたいと思われていたことを、その時初めて知りました。あの日の保健の授業がとても印象的だったのは、先生が私たちに伝えたかったことがあったからなんだと、その時分かった気がしました。

私は今、西宮市で中学校の教員をしています。世の中のいろいろな課題も、みんな語り合っていけば解決できるということを、先生から教えていただいた「一日一生涯」の言葉と一緒に生徒たちに伝えていきます。

できるものなら、もう一度お話がしたいなあと思います。でもそれは叶いません。今日を一緒に過ごす人たちと明日も必ず一緒にいられるとは限りません。「一日一生涯」。今日を丁寧に生きていきたいと思えます。すてきな考え方の人は、いつまでも多くの人の記憶の中に生き続けます。先生が願われていた差別のない世の中が実現するように、私も自分の思いを伝え、多くの人と語り合っていきたいと思えます。